ペンフレンド

中村　アキヤ

第一章　北海道旅行

「おい大変だ！　取りあえず次の日曜日に俺の家に集まれ」

親友の前野道雄から連絡があって中山あきらは新宿の自宅から山手線、東横線を乗り継いで碑文谷にある彼の家に急いだ。

上越の山々から初雪の情報が入り、そろそろスキーの手入れをしなければという季節になっていたが、東京は十一月の初旬にしては暖かく、道路際の垣根越しにみえる形の良い楓も全面紅葉にはほど遠い状況だった。前野の家はさすがに父親が一流商社の重役だけあって、立派な門構えの二階建ての大きな家だった。その二階の一部屋が前野道雄の勉強部屋で、隣の空き部屋の八畳間が今はそれぞれの大学は異なるが、戸山高校時代からの悪童連のたまり場になっていた。

あきらが着いた時にはすでに高校同期の中田健二と石川正が、出された紅茶とクッキーをつまんでいる最中だった。中田はあきらと中学、高校と進学コースを共にしているが、この仲間の中ではもっともオマセで、当時としてはややキザなところのあるいわゆる洒落者だった。尤も本人はスマートをもって任じてはいたが誰もそれを認めようとはしなかった。声を掛けた仲間全員が集まったところで、突然自宅に召集をかけた、一橋大にストレートで入った前野がやや得意気に切りだした。

「去年みんなで北海道に旅行した時、札幌の温泉で逢った津田塾大のグループがあったろう？　ほら、石川が頼んで写真のシャッター押して貰ったでしょうが。あのグループの一人と偶然大学のゼミの合同ハイキングで逢ってさ。いや先週だよ。どこかで見たことがあると思ったら、向こうから北海道でお会いしましたねって云ってきたんだよ」

「フーン、それで？」

「それでって、どうしようか？」「なにを？」

二回も愚問を発したのは石川である。彼は一部上場会社の社長の御曹司で仲間うちでは一番のおくてであった。彼の顔はその輪郭の割に造作が大きく、特に大きい耳にちなんでガチャというあだ名を貰っていた。なんでもインドから上野動物園に贈られた象の名前なのだそうだ。

「馬鹿だなあ、女の方から声をかけてきたのに何もしないっていうほうはない

よ。前野、その子とは連絡はつくんだろ？　北海道で会った人達で集まってその時の写真でも見せ合いませんか、とかなんとか理由をつけてさ、一度会ってみようよ」と中田が提案した。

高校時代はいつもつるんで遊んでいたのに、ひとたび大学が別々になってしまうと、以前のように集まってワイワイ騒ぎながら何かをやる機会が無くなって、そろそろ昔の仲間となにかしでかす共通の目的が欲しくなっていた矢先であった。

当時、中田の入った上智大は女子学生のほうが男子よりも数が多かったし、学業も真面目な女子学生のほうが優勢だったので、中田は学内では平素から何かと出番がすくなく、フラストレーションが溜まっていたのだ。ただその環境のおかげで彼は女子の扱いは仲間うちでは一番のエキスパートで、現に昨年の夏、札幌郊外のユースホステルで津田塾大のグループと会ったときに、頼まれもしないのに名刺を出して自己紹介をしたのは彼だけだった。他の者は学生の分際で名刺など持つものではないと信じていただけに、内心中田のパフォーマンスに一歩遅れをとったと悔やんだものだった。

かつての同期生だから高校の卒業年次は同じなのだが、あきらが一浪して東大に入った翌年に石川が慶応に入学し、既に大学生活を満喫している前野や中田と語らって、高校時代からの懸案である北海道旅行を敢行したのはこの昭和三十三年の夏だった。

この頃は、町は岩戸景気に沸き、東京タワーが完成した時代である。ユースホステルの宿泊料金は一泊三百円から四百円、昼飯の蕎麦やラーメンは五十円、アイスクリームは二十円、二週間の旅行予算が一万五千円の時代だった。

上野から青森まで急行で八時間、青函連絡船が一時間、そして函館から札幌まで五時間。北海道がこんなに遠いとは仲間の誰もが思っていなかった。函館からの列車では座席がとれず、最後部の車両のデッキに新聞紙を敷いて座った。

その車両はどこかの女子大の修学旅行の貸切車だったので、車両の反対側のデッキに近いトイレに行くには女の館を通過しなければならず、その度に大勢の女子学生の好奇心溢れる眼差しと引率教官の鋭い視線に晒されるのであった。

札幌から路線バスで、未舗装の道路を砂煙と共に三十分程走った小さな川の畔に、ポツンとそのユースホステルはあった。札幌の奥座敷といわれる定山渓温

泉のその又奥にある、薄別温泉とは名ばかりの小さな旅館で、一階は玄関と厨房それに家族と従業員の居室、二階は八畳の客室が四間あり、湯殿は小さな橋を渡った対岸の堀立て小屋にあるのだった。　滅多に客が来ないことは風呂場の網戸には無数の蛾が張り付いていたし、煙出しには蜘蛛の巣がたなびいている事から容易に推察できた。一行が長旅の汗を流し部屋に戻った頃、どうやら次のバスで男のグループと女のグループの二組の学生達が到着したらしく、そんな小さな宿でもにわかに活気を帯びてきたのだった。

　夕食といっても貧乏学生の旅行ではビールを飲むわけでもなく食事が終っても何もすることがなかった。当時はテレビのような洒落た設備はなく部屋の床の間は荷物置き場になっていた。ユースホステルのきまりで各自持参したシーツと枕カバーを自分の布団につけながら、北海道に着いて最初の夜になにをしようかとみんな考えていた。

　一人寝そべってパラパラとガイドブックをめくっていた中田が、突然ムクリと半身をもたげ、「そうだ、さっき着いたあの女の子達に声をかけて一緒にトランプでもやろう」と提案した。もちろん異論のあるはずがない。気の早い前野は早速自分のリュックからトランプを取り出している。ところが誰が彼女達に声をかけに行くかで問題が起こった。見かけに寄らず皆純情で、誰も見知らぬ女性の一行に声を掛ける勇気を持ち合わせていなかった。

「提案したのは俺だから、俺以外のヤツが声をかけに行くべきだ」と中田。
「いや、素晴らしい提案をしたのは中田、お前だから本人が最後まで責任を持つべきだ」
　と前野が応戦した。石川もすぐに参戦した。
「やはり中田、お前が一番適役だよ。俺なんか一人っ子だろ、女の子と口を利いたこともないもん。俺、女の子としゃべるとすぐどもっちゃうんだよ」
「石川、それなら余計いい機会だよ。ちょっと練習にやってみろよ」中田がすぐに逆襲した。最後にあきらが口を開いた。黙っているといつお鉢が回ってくるか判らないのである。
「トランプに誘うなら急いだほうがいいよ、もう一組の男性軍はどうやら早稲田の連中らしい。アイツら図々しいし手が早いから」

「そんなら中山、お前行けよ」
「平等にジャンケンで決めよう。各々が負ける確率は四分の一だよ」
議論は何時おわるか見通しは立たないので、結局あきらの提案に衆議一決した。勝負はたった一回のジャンケンで決まった。他の者は皆グーを出したのに石川のみがチョキを出し、慌てて伸ばした二本の指を引っ込めたが遅かった。
勝負がついた瞬間、ジャンケンに勝った誰もが助かったと安堵したが、同時にこれはまずいぞと思ったのも事実であった。

石川は名家の一人息子で、学校ではともかく家では蝶よ花よと育てられた跡継ぎ様、早生まれのため体力的にも仲間と比べて頑健とはいえず、仲間うちでもややミソッカス気味に扱われていた。山登りの際にはいつも仲間が文句も云わずに彼の荷物を持ってやるのが常であった。というのも彼のリュックにはつねに当時は貴重品だったパイ缶とかコンビーフとかハム類が詰め込まれていて、誰もがお相伴に預かるのを楽しみにしていたのだ。
そんな石川がジャンケンに負けてこんな大役を果たせるとは誰も思わなかった。案の定、石川は額に皺を寄せ、大きな目をことさらに広げて、
「俺はできないよ」と悲痛な叫びをあげた。
「弱ったなあ。どうしよう。もう一回ジャンケンしよう」
「冗談じゃないよ。何のために真剣にジャンケンしたんだ。石川、ちゃんと責任を果たせよ。な?」
「困ったな、いったい何て云えば良いんだい?」
「簡単だよ、一緒にトランプでもしませんか、とこう云えばいいのさ」
「部屋の襖を開けるときは?」
「今晩はとか、ごめんくださいとか。そんなことは自分で考えろよ」
「勘弁してくれよ。誰か行ってくれないか?」
石川は額の汗を拭きながら身を縮めてまさに絶え入らんばかり、他の三人も石川をなじりはするが、代わってやろうという者はいなかった。実際ジャンケンに負けていたら石川と同じ心境になることは自明だったから。

そうこうしているうちに遠くの方で男女の爆笑する声が聞こえてきた。戸山高校オービー組がジャンケンの結果処理について鳩首協議している中に、早稲

田組がさっさと女性軍の部屋に入り込んだのである。

一行にとって北海道旅行の最初の夜は惨めなものになった。時折嬌声すら混じる楽しそうな笑い声を聞きながら、四人は為す術もなく悶々と布団に転がっていた。ロビーなどという洒落たスペースもない鄙びた一軒家の旅館なので、外に出ても飲み屋がある訳でもなし、聞こえるのはせせらぎに混じる河鹿の声のみである。寝るにはまだ早すぎる、といっても何もするものがない。時間とエネルギーを持て余していた前野が急に自分の枕をあきらにぶつけてきた。退屈していたあきらがすぐに応戦した。枕が二、三回空中を往復したとき再び中田がムクリと起きあがった。

「よし、俺がレフェリーをやるから二人で枕ボクシングをやれよ」この両者は高校の修学旅行で京都に泊まった時、広い座敷に敷かれた布団の上でプロレスごっこをやったことはあるが、枕ボクシングをやるのは初めてだった。あきらと前野は両手に枕を持って向かいあって正座し、中田のチーンという合図でお互いに、「この石川め」とか、「なんで北海道まで来て俺達がこんなことをしなければいけないんだ」とか云いながら殴り合った。石川は責任を感じてか黙って二人の枕ボクシングを見ていた。時折楽しそうな早稲田組の笑い声が聞こえてきた。淋しくておかしな枕ボクシングは三分と続かなかった。

翌朝出発の用意ができたところで石川が思い詰めたような表情で部屋を出て行き、すぐに女の子達を連れて引き返してきた。

「写真のシャッターを押して貰うように僕が頼んだんだ」と石川が釈明した。

昨夜の万分の一でも責任が果たせればと思ったのであろう。

五人の女子学生は部屋の入り口にかたまって、部屋の中に入ったものかどうか逡巡していた。バスの出発時刻が迫ってきて、なんとかしなければと思ったのか、

「私でよかったらシャッターを押すわ」と言って一人だけ部屋に入ってきたのが青木めぐみだった。

白い半袖のブラウスの上に薄いブルーのカーデイガンをはおり、ハイキング用の白い帽子をかぶっていた。彼女が殺風景な男ばかりの部屋に入っただけで清

楚な姿が浮き出て、そこだけ明るく感ぜられた。彼女はピント合わせのファインダーを覗きながら前野の上着の襟章を目敏く見つけ、「貴方達一橋なの？　私達は津田よ」と話しかけると共に、よかったわと同意を求めるように、部屋の入り口で様子を伺っていた他の四人のほうを振り返った。一瞬長いまつげがゆれて見えた。入口で成り行きを見守っていた彼女らも一橋大という名前を聞いただけで親近感を抱いたのか緊張を解き安心したように見えた。

バスを待つ間に中田が名刺を渡し、仲間を紹介した。先方のリーダー格の女性が黒川啓子と自己紹介し、ついで他の四人を紹介した。互いに今後の旅程を教え合い、次に会える地点はどこか話している最中にバスがきてしまった。乗った座席が離れていたのでそこで話が途絶え、バスの終点の札幌駅でそのまま別れたのだった。

あきら一行は汽車で旭川に向かい、思いきり北海道の夏を堪能することになった。層雲峡からは黒岳を経て大雪山のお花畑まで遠征し、雪渓を横切るひぐまを遠望して騒ぎ、阿寒では噴煙をあげている雌阿寒岳に登って、月世界もかくやと思われる活火山の荒涼たる風景に感激した。摩周湖では渦巻く霧しか見えなかったが、翌日の登別の大浴場で子どものように泳ぎまくり、二週間の大旅行を終える頃には旅行の初日に薄別温泉に泊まったことも、その時津田塾大の学生に出会ったこともすっかり忘れてしまっていた。

それから約五ヶ月後に前野がゼミの津田塾大学との合同ハイキングで偶然会ったのが仰木あさ子だった。彼女は小柄で控え目だったが、父親は文芸春秋などで活躍中の有名な評論家で、そのせいか頭の良いしっかりした性格の子だった。中央線沿線の国立に家があり、小金井に住む青木めぐみの親友だった。

仰木あさ子は早速北海道に同行した仲間に前野からの一度会って見ないかというメッセージを伝えた。

「面白そうじゃない？　会って見ようよ。　彼らどんな顔だったか覚えていないけど、皆で会えば恐いことないわよ」

一番積極的なのは黒川啓子だった。彼女は名古屋出身で大学の寮長を勤め、同郷の一橋大の学生とすでに婚約していたので精神的に余裕もあり、落ち着きも

あった。グループの皆から信頼が厚く、皆が迷っているときに結論を出すのは決まって彼女だった。他のメンバー西田紀子も久慈晴枝も会ってみることには異論がなかった。

十一月の晴れた日曜日に、一同は北海道旅行で撮った写真集を手に新宿のマンションハウスという名曲喫茶に集合した。当時にしては珍しい煉瓦造りの建物で、見た目は外国の絵はがきなどに見られるシャトー風の建物だった。改めての自己紹介で始まった会合は始めの中こそなんともぎごちない雰囲気だったが、そこは若いもの同士、すぐに打ち解けてそれぞれ北海道の何処が良かったの、何が美味しかったの、あそこは行けなくて残念だったのと取り留めもない話が続いた。

男性軍は主に如才ない中田が喋り前野がフォローするパターンで、内弁慶の石川は黙っていたのは当然だった。あきらはといえば話の進行には付いていったもののどちらかと云えば黙って女性軍の観察に終始していた。

ここでも黒川啓子がリーダーシップをとり、一つの話題が途切れるとすかさず次の話題へ展開する手慣れた話術と社交性を発揮していた。青木めぐみは何の話でも仰木あさ子と久慈晴枝の両者に同意をもとめるように話しかけ、おとなしい二人を話題に誘い込むのだった。もう一人の西田紀子は面白い話には笑ってみせるがどちらかというと沈黙を守り、伏し目がちで終始していた。

彼女達は英文科の学生で三年生だった。男性軍のほうはストレートで入った前野と中田が大学三年、駿台高等予備校で一年過ごしたあきらが大学二年、二浪した石川がまだ一年だったが、年齢は皆同じだった。

一対一で話しをするのとは違ってグループ同士で話し合っていると話題は尽きない上、余計な緊張をする必要がなかった。お互いに相手のレベルと素性も大方想像がつくし、コーヒー一杯だけだったが、三時間もいるとかなり打ち解けて冗談を云い合う仲になっていた。別れる時間が迫ってきたころ前野があきらに、

「だめもとで彼女らをスキーに誘ってみようか?」と囁いた。

頷くあきらを横目に前野は

「我々はこの冬に蔵王にスキーに行く予定なんですが、よかったら一緒に行き

ませんか？」とおそるおそる誘ってみた。
　一瞬沈黙が座を支配した。断られるかも知れないと男性軍は思ったし、どう返事しようかな、と女性軍は思った。
「ウワー行きたいな」と大声をだしたのは青木めぐみだった。
「スキーはやってみたいのですが、教えてくれる人が居ないんですもの。貴方達お上手なんでしょ？」この一言で座は急に活性化された。
「僕が手とり足とり教えてあげますよ」と答えたのは内気な石川だった。石川は仲間うちではスキーの経験が一番少なくて、緩斜面をボーゲンで降りてくるのがやっとだった。　でも全くの初心者相手なら優越感をもって教えられると思ったのだった。
「私は別のパーテイとスキーに行く予定があるからご一緒できないけど、貴女方丁度いい機会だから連れていって戴いたら？」との黒川啓子のアドバイスで、以後の計画は前野と仰木の二人が両サイドの幹事になって取り進める事になった。

「スキー？　そんな危ないことしては駄目だよ。それに誰と行くんだ？」
　日本橋で大きな公認会計士事務所を経営しているめぐみの父はめぐみが小遣いをせびったときに質問した。めぐみは長女で二歳違いの妹と父親が戦後復員してから生まれた小学生の弟がいたが、彼女が父親にもっとも甘えていた。晩酌をしている父親に如才なくお酌をしたり肩を揉んだりして、いつも母親には内緒で小遣いをせしめるのだった。わずかな量のアルコールですぐに真っ赤になる父親は、マッチ棒を耳掻き代わりにつかいながら愛娘の懇願に目を細めて、決まって最後はウンというのだった。

「靴とスキーは現地で借りられるからウエアと食糧を用意するように」とのスキーに行った経験のある仰木の指示で、めぐみは伊勢丹のスポーツ用品売り場で半日を要して紺のヤッケとスキーズボンを選んだ。

　結局、女性は青木めぐみと仰木あさ子が、男性軍は前野、石川、あきらの三人が参加することになった。蔵王は例年よりも積雪は少なかった。さして大きくもない温泉街のいたるところでイオウの臭いが鼻を突いた。温泉街の正面にある石段を登り、高見屋という古い木造の宿屋に到着した。享保年間創業の由緒ある宿屋である。ここからは湯煙の立っている側溝沿いの細い道を辿れば、すぐに初

心者用のゲレンデにたどり着ける。そこは良く踏み固められ、傾斜もなだらかでめぐみ達のレッスンには好都合だった。

仰木はなんとか一人で滑れるので、石川がめぐみの専任コーチを務めた。彼は昨年のスキー学校で自分が教わった通りのことをそのままめぐみに伝授したのだった。ストックの持ち方から始まって歩き方、真っ直ぐ上方に斜面を登る開脚登行、方向転換のためのキックターン等。

めぐみは素直に初歩の訓練を受け、教えられるままにおそるおそる緩い斜面を滑ってみた。始めの二、三回は滑り出しの際ストックに体重を掛けすぎ、脚だけが先行して尻餅をついたが、要領を覚えおぼつかない姿勢ながら少し滑れるようになると、転んでも転んでもヤッケの雪を払う間を惜しんで練習に熱中した。仰木はリフトを使って曲がりなりにも滑っているし、前野やあきらはときどきレッスンの様子を見に来るものの、シーズン始めの自分の調子をあげるのに夢中だった。粉雪が舞い始め、夕暮れが迫ってきた。気温が下がり雪が締まってきて、歩く度にキュッキュッと音をたてる頃、全員クタクタになって宿に戻った。

一風呂浴びたあとは炬燵を囲んでビールを飲み、蜜柑を食べながら、皆で際限なく駄弁った。大きな炬燵の三方を男性が占め、女の子二人は並んで一方を占めた。スポーツをしたあとは急速に親密さが増し、全員ずっと昔からの友達のような気分に浸っていた。

「お晩です」と声がして廊下の襖が急に開いた。もんぺ姿のおばさんが篭に笹餅や美鈴飴、駄菓子に干し芋、絵葉書まで持って部屋から部屋へ売り歩いているのだった。めぐみにとってはどれも珍しく食べ物を少しずつ買ってはみんなで試食した。

「屈斜呂湖の湖畔のユースホステルでね、みんなで温泉風呂に入っていたんだ。湯船から首を延ばすと湖面が見えてとても気分がよかったんだ」とあきらが話しはじめた。

「北海道は湖畔の温泉が多いわね」

「うん、その温泉のお湯で石川が頭を洗ったんだ」

「清潔好きなんでしょう?」

「彼はチョット潔癖症のきらいがあるのさ。それで持参した石鹸を髪の毛に塗りたくったら一分もしないうちに、奴の髪の毛がカチカチに固まってしまったんだ」

「そうなんだよ。まるで石膏で固めたみたいに髪の毛同士がくっついてしまい、いくらお湯で洗っても石鹸が落ちないんだ」と石川があとを引き取った。

「俺が困っているのに皆笑うだけで助けて呉れないんだよ。中山なんて化学屋らしく、それは温泉のお湯の中にふくまれている金属成分と石鹸の有機質がキレートをつくって三次元的に結合したんだ、などと難しい解説するだけで、どうすれば直るか教えてくれないんだ」

「それでどうしたの？」

「みんなはさあ食事だ、なんていってさっさと出てしまうし、結局俺一人で風呂に残って水道の水で髪の毛を一本々々しごいて石鹸を洗い落としたのさ。食堂に行ったときはみんな食事を食べ終わっていたんだ。あのときほど友達甲斐が無い奴らだと思ったことはなかったよ」

「友達甲斐が無いっていえば中田が味噌汁を吐いた時もそうじゃないか」

意外な話題の展開に仰木が顔をしかめて尋ねた。

「まあ汚い、なんの話？」

「中田は胃腸が弱くて、疲れた時などには時々吐いたりするんだ」と煙草の火をもみ消して前野がおもむろに話しはじめた。

「あいつは特に味噌汁に弱くて、朝でも晩でも味噌汁を飲んだときは要注意なんだ」

「そう、催した時は待ったなしで、気持ちが悪い、と言ったか言わないかの瞬間にドバーッと吐くんだ。もの凄い勢いでまるで火炎放射器のようにとばすんだよ」とあきらが途中から話に割り込んだ。彼は中田のことは中学の時から知り尽くしている。

「だから中田が気持ち悪いと言ったら、すぐにあいつの顔の正面から逃げなくてはいけないんだ。北海道の黒岳に登った時、僕は彼の前を歩いていた。ウッという声が聞こえたんで後ろを振り返った途端ドバーだろ？　参ったよ」

「それで？　引っかかったの？」

めぐみがニヤニヤして聞いた。

「いや、残念ながら、その時は僕の肩先を掠めて行ったよ」

「おい、俺が話したいのはそれでは無いんだ。友達甲斐の話なんだ」と前野が話を前に戻した。みんなの視線が自分に集まると、彼はまたおもむろに煙草に火をつけた。

「いつか山の帰りに松本の浅間温泉に泊まったんだ。そこで食事中にまた中田がやってしまった。皆慌てたよな？　あり合わせの新聞紙とかタオルとか総動員して食卓から畳から拭いて回ったよな？」

「あの時は、俺が大急ぎで女中を呼びに行き、雑巾を沢山持ってきて貰ってなんとか座はおさまったんだ。でも俺がそこで感心したというか、呆れたのは掃除にきた女中に前野がサッとチップをやったんだ」とあきら。

「あら、当然じゃないの？」

「問題は渡した金額なんだよ。一泊二食で七百円というのを学生だから六百円に値切って泊まっているのに、前野は女中に五百円もあげちゃったのさ。さすがに金持ちは違うなと感心したんだ」

「あの時は五百円札しか無かったんだよ。お釣りをくれともいえないし…」と前野が弁解した。すかさずあきらが続けた。

「本当は感心することなんか無かったのさ。前野はね、女中が喜んで帰ったあと、あのチップは割り勘にしようと言い出したんだ。自分だけ恰好よくチップやったくせに」

「そうだよ、ああいう場合は吐いた中田が払えばいいんだよ。なんで関係ない俺が払わなければならないんだ？　前野もあんなに払うことなかったんだよ。

大体俺は酒が飲めないんだ。ああ言う場合は酒を飲んだ奴だけで割り勘にすればよかったんだよ」

石川もあのときの不合理な割り勘説には賛成できなかったようだ。

「それだから友達甲斐がないっていうんだよ。あのとき中田は苦しくてなにも考える余裕がなかったんだ。だから俺が代わってチップを払ってやっただけなのに」

「でも五百円は多かったよ」

「そうかなあ？」と前野。

「そうそう割り勘といえば、石川、お前だって割り勘を強要したことがあったぞ」とあきらが話題を転換した。

「どこに行くときだったかな？　新宿発の夜行列車をホームで並んで待っていたんだ。前から二十番目位までは確実に座れるんだが、その時は座れそうもなかった。その時石川がとなりの車両の乗車口の一番前に並んでいる友達を発見したんだ。そこで我々はその列に横入りして並び、おかげで悠々と座席に座る事が出来たんだ」

あきらがお茶をぐっと飲んで先を続けようとしたとき前野が話を引き取った。

「それで、山から帰って一月以上も経ってから皆で会った時、石川があの時、横入りさせてくれた友達にお礼をしたから、その代金を割り勘にしろっていうんだ。石川は自分の小遣いから出したんだから絶対払ってくれと泣かんばかりに主張したけれど、何に幾ら払ったか判らないから結局ウヤムヤになったけどね」

「石川さん、何とか言ったら？」

めぐみがけしかけた。疲れが出てウトウトしていた石川は、

「うん、いいたいことは山程あるけど、今日はこの辺で反論はしないよ。さあ明日は青木君にボーゲンを教えなければならないから俺はもう寝るよ」と言い終わらないうちに鼾をかきはじめた。

山脇学園そして津田塾大学と、高校も大学も女性ばかりの集団で育ったためぐみにとって、どの話も新鮮で面白かった。今回の仲間は皆快活な素直な青年だった。前野道雄は次男坊のせいか年のわりには世慣れたところがあった。どんな意見にも始めは決して反対せず一旦は肯定してから、煙草に火をつけておもむろに反論していくタイプ。自分の意見ははっきり出さないが、中庸を行く点では誰もが一目置く信頼できる人間性であった。

石川正は典型的なお坊ちゃんタイプでわがままであるが最後まで我を通すことはせず、なんやかや言いながらも結局は大勢に従うタイプであった。

中山あきらの家は他の二人ほど金持ちではなかった。父親は蔵前工業を出て、通産省から民間の会社に横滑りしたばかりで、実家は新宿の地主でいくばくかの家作があったが、年老いた祖父母が存命中なので、長男のあきらとその二人の妹の学費を賄うのに汲々としていた。母親の美知子は東京第三高女の出身。

頭の良い明るい性格で、前野の母親とは先輩後輩の間柄で息子達と同様仲が良

かった。母親の性格を受け継いだあきらは合理的な考え方を持ってる一方、適当に妥協する鷹揚さも持っていた。又、どんなにのめりこんでいても、どこか冷めた目で状況を観察する客観性をもっていた。

誰もが偏屈なところがなくて、みんな感じの好い冗談の上手い仲良しグループだった。こんな彼らとヒョンな馴れ初めでスキーに来て、青木めぐみも仰木あさ子も口には出さなかったが幸せだと思った。

一方あきらにしてみれば、クラシック音楽に詳しい石川とめぐみの会話にはついてゆけなかった。山登りやスキー以外に、音楽や絵画についても人様の前で恥ずかしくない程度の知識は必要だなと感じた。めぐみが月に一度のN響の定期演奏会の会員だったことを知って、自分も会員になれば音楽の教養もつくし、いやでも月に一回はめぐみに会えると思った。あきらは帰宅してから母に相談してN響の会員になったのだった。

二日目の夜ジンギスカン料理を平らげた後、隣室のオバさんから少し静かに喋ってくれないかと苦情がきた。夕べもうるさくて眠れなかった由。あわてて全員で逃げるようにホテルのホールに行った。小さな板敷のホールは何もロマンテイックな雰囲気はなかった。ビールを飲みながら歓談していると先客がダンスを踊り始めた。その頃のこととてCDがあるわけでなし、有線放送があるわけでもなかった。三分で終わるSPレコードを何回も繰り返しかけるのである。そのレコードたるやダンスに適しているのは限りがあって、フランク永井の「有楽町で逢いましょう」とそのB面、そしてパットブーンの「砂に書いたラブレター」とそのB面くらいのものであった。その時まともに踊れるのはあきらと仰木あさ子だけであった。

あきらは東大合格を夢見て高三、浪人の二年間全てを捨てて猛勉強し、そして入学を果たしたあとは、当面の目標を失い何をしたらいいか判らなかった。その様なときにダンス研究会なるチラシを駒場の東大構内で貰った。

これは研究会とは名ばかりで、構内の同窓会館のホールを会場とした、大学公認の先輩学生によるダンスの教習所みたいなものであった。あきらと同じ目標を失ったらしい新入生が多数応募していた。

パートナー役の女子は渋谷近辺の青山学院とか実践女子大の学生やＯＬが多かった。講習料が安いのと東大生が相手ならば危険がすくないと踏んでのことだったのだろうか、万が一間違いがあったとしても、却って玉の輿を掴む可能性を期待したのかも知れない。

受講生は男女別のグループに分けられ、銘々に渡されたブルースとかワルツとかのステップが数字入りの靴型で描いてある紙の通りに、脚を運ぶ練習をさせられる。しばらく音楽に合わせてその練習を続け、ステップを覚えた頃合いを見計らっていよいよ男女組んでの練習に入る。

それぞれ男子一列、女子一列に、平行して並び、かけ声と共に男子は右に女子は左を向く。正面になった人がその日のパートナーである。互いに緊張してこわごわ組んでみたものの、片手にはステップの描いてある紙を持ち、腰を引いて自分の足元を見ながらステップを踏む各組の恰好は、さながら柔道の組み手を思わせた。足の運びだけが念頭にあるので顔を見交わす余裕もなく、曲のメロデイは耳に入らず、曲のリズムにも全く無関係に一斉に蠢く様子は異様な光景であった。

それでも二時間の講習が終わる頃には曲がりなりにも基本ステップを踏めるようになり、ようやくパートナーの顔も識別できるようになる。

とにかく同じ年頃の、それも初対面の異性と、堂々と手を握り腰に手を回す、肩に腕を預けるなんていうことができるのはダンスのみに許される。

これはドキドキするような凄い魅力であった。回数を重ねると、講習が終わった後一緒に喫茶店でお茶を飲むような洒落たこともできるようになった。

蔵王温泉のホテルのホールであきらはめぐみに、仰木は前野と石川にダンスを教えることになった。全員スリッパを脱ぎ捨て、スキー用の厚手の靴下で夜遅くまで踊った。めぐみを抱いた時、若い女性の匂いを直接嗅いであきらはなんとも言えぬときめきを感じた。これはダンスの講習会でおずおずと初対面の相手を抱いた時の感じとは違っていた。お互いに安心して身を委ねるといった信頼感と親近感、それに異性の持つ神秘性に対する憧れがミックスされた感情だったのかも知れない。あきらの右肩はめぐみが不必要にもたれたので翌日朝から痛かった。

スキー最終日は皆で蔵王山の中腹にあるドッコ沼まで遠征することにした。赤いゴンドラで高度を一気にあげると、そこは雪質も景色も一変した別世界であった。どこまでも青い空を背景にした霧氷が朝日に映えて夢幻的な雰囲気を醸しだしていた。

「こんな綺麗なところがあるんだわ」とめぐみは思った。

「やっぱり思い切ってこの人達とスキーに来て良かった」と。

午前中は各々実力に応じて粉雪のゲレンデを楽しみ、ドッコ沼ヒュッテで早めの昼食を済ませてから、蔵王温泉までの滑降を楽しむ事になった。といっても初心者連れなので通常のゲレンデではなく、夏だけに使用されている温泉までの林道を滑るのである。

雲の合間に樹氷の林立している山頂を垣間みて一行は滑りはじめた。林道といっても急な坂もあればカーブもある。余りに急な坂では慎重な石川はスキーを脱いで歩いて降りたが、恐い者知らずのめぐみは、

「えー？　またこんな急な坂よ、どうしよう」といいながらも強引に滑り降りた。当然ながら毎回瘤に跳ねられて帽子もサングラスも何処かへすっ飛んでしまうような、激しい転び方を繰り返した。

後半になるとスタミナも限界に達し、ちょっとした凹凸でも膝のクッションが思うように振動を吸収できず、ヘタヘタと雪面に崩れ折れ、そのままズルズルと斜面をずり落ちる情けない光景を呈するのであった。最後の難所とおぼしい地点でめぐみは大きく空中に飛ばされ雪面にたたきつけられた時、自分のスキーで反対側の脚を強く打ったようであった。

精神的には満足したが肉体的にはボロボロになってようやく宿について風呂に入ると、めぐみは全身痣だらけの自分を発見した。夜になって痛めた脚が腫れ上がった。

「こんなに腫れると痛みで眠れなくなるよ」と石川が心配してホテルのフロントから湿布を貰ってきた。湿布は痛みを抑える効果はそれほどではなかったがめぐみは疲れのせいかその夜はよく眠れた。

上野駅で別れるときめぐみのほうから

「足手まといの私達の面倒を見ていただいて本当にありがとう。写真が出来た頃にまた会いませんか？」と呼びかけがあった。

仰木あさ子も、「こんなに楽しかったスキーは初めてだわ」と満足感を表した。

「僕達も面白かったよ。そうだね、今度はスキーに行かなかった人も誘ってハイキングなんてどう？　どこかの山頂でスキヤキでもやろう。今日は三月二十五日だから四月十日頃やることにして、全員の都合を合わせるのは面倒だから、我々以外は、その時都合のいい人だけでゆくことにしよう」とあきらはちゃっかりと次のハイキングを提案した。　めぐみもあさ子も一も二もなく賛成した。

これが長い交際のきっかけになるとは誰も思ってはいなかった。（続く）

（１３３３９語）